

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

Adventures of Huckleberry Finn における21世紀新解釈への提言：米墨戦争と volunteers の呪い

メタデータ	言語: ja 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2023-03-24 キーワード (Ja): アメリカ文学, 米墨戦争, 義勇兵, 『ハックルベリー・フィンの冒険』, マーク・トウェイン キーワード (En): 作成者: 山本, 祐子 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学短期大学部
URL	https://doi.org/10.18956/00008066

Adventures of Huckleberry Finn における21世紀新解釈への提言

— 米墨戦争と volunteers の呪い —

山 本 祐 子

要 旨

Adventures of Huckleberry Finn は20世紀後半の黒人公民権運動の高まりを受けて、南北戦争と奴隷解放に偏重した作品解釈が続いてきた。しかし *Huckleberry Finn* は、これまで一切触れられてこなかったが、米墨戦争の真ただ中にあった。米墨戦争は、アメリカによるメキシコへの侵略戦争であり、米兵による戦争犯罪も多く記録されていることから、歴史および文学研究では黙殺される傾向にあり、本作品との関係性すら認識されてこなかった。そこで本論では、封印されてきた米墨戦争という視点から *Adventures of Huckleberry Finn* を読み直すことで、21世紀という歴史回顧の時代だからこそ可能となった、新解釈を提示するつもりである。

キーワード：アメリカ文学、米墨戦争、義勇兵、『ハックルベリー・フィンの冒険』、
マーク・トウェイン

はじめに

The Adventures of Tom Sawyer (1876) と *Adventures of Huckleberry Finn* (1884) ほど、1840年代後半のミシシッピ河沿いで暮らす開拓民たちを精彩に描き出した小説はない。子供たちは海賊ごっこに興じ、大人たちは各々の仕事に精を出す。どの町にも犯罪や差別はあったが、世は泰平であった。いや、泰平であったと読者は思い込まされてきた。作中はもとより、文学批評においてさえ一度も言及されてはいないが、Tom と Huck の冒険が繰り広げられる傍らで、アメリカはメキシコとの戦争に突入していた。世に言う、米墨戦争 (1846-48) である。戦場はテキサスとメキシコ北部であったが、戦争の影響は全米に波及し、開拓民たちも戦争に駆り出されている。つまり少年たちの物語は、牧歌的なフロンティアではなく、戦時下を描いた小説だったということもできる。

しかし Twain は米墨戦争への言及を避けてきた。もともと19世紀のアメリカ人作家は戦争を扱いたがらない傾向にあったが、なかでも Twain は南北戦争 (1861-65) について僅かに触れるだけに留まり、米墨戦争に関しては、まるで起こっていなかったかのように沈黙を貫いた¹⁾。

ところが20世紀に入ると、南北戦争はもはや歴史のひとつとなり、米国史の転換期として人々の関心をくぎ付けにするようになる。Twain 研究の分野でも、南北戦争は繰り返し取り上

げられるようになり、作者との関りや影響についても詳細な論議が進んでいる。ところが米墨戦争だけは彼の子供時代に起こっていながら、彼との関係で論じられることはなく、関係性そのものが認識されてこなかった。米墨戦争は、有り体に言えばメキシコへの侵略戦争であっただけに、暴力でもって他国の領土を奪い取ったという過去は「自由と平等」を標ぼうするアメリカにおいては触れられたくない暗部となり、歴史研究もさほど盛り上がりせず、文学批評では看過されてしまった。

そこに、本研究につながる転機が訪れた。Cormac McCarthy が米墨戦争直後を題材とした歴史小説 *Blood Meridian* (1985年) を出版したのである。McCarthy は、埋もれた当時の小説から、未出版の従軍体験記や記録までを調べあげ、同時代人の証言をもとに、実在のアメリカ人傭兵部隊 Glanton Gang を作品に表した。Glanton Gang とは、米墨戦争後にあぶれた兵士崩れの寄せ集めで、ネイティブ・アメリカン²⁾ の頭皮狩りで賞金を荒稼ぎするなど数々の悪名を残す、残虐非道な傭兵部隊であった。この Glanton Gang が、敵だけでなく、時には同胞や民間人すら脅かす、殺人集団に成り果てていく様が、作品では赤裸々に、しかも現実にも即して、描かれていたのである。これが、アメリカ文学界に革新的な衝撃をもたらしたことは言うまでもない。この作品が出るまでは、南西部開拓期を理想化し、米墨戦争を正当化しようとする文学的伝統が根強かったからだ。*Blood Meridian* は、米墨戦争という血塗られた歴史を、客観的に振り返り、議論するべき時期に来ていることを世に知らしめたのである。

Blood Meridian の視点を得て初めて、気付かされたことがある。*Blood Meridian* は米墨戦争直後の1849年を舞台としているのだが、これと全く同じ時期に Tom と Huck の冒険も進んでおり、戦争とは無関係でいられるはずがなかったということだ³⁾。言い換えれば、彼らの作者でありモデルであった Twain 自身も、同時期に戦争を経験したことになる。

本論の目的は米墨戦争の視点から、*Huckleberry Finn* を読み直すことにある。その時代考証および参考史料として、*Blood Meridian* と、本作品の下敷きとなった19世紀南部小説や従軍体験記を参照する。これにより、安穩と暮らしていたと思われていた開拓民たちが、実は戦争と隣り合わせの緊迫した状況にあったこと考察し、理想化された開拓期の闇を示したい。かつてのアメリカ政府は、開拓期を国家創世記として神聖視し、神話化することで、威信付けに利用してきた。しかし20世紀半ばごろから、そうした政治的思惑や圧力も薄れ、開拓期を多方面から冷静に振り返る歴史回顧の風潮が芽生え、*Blood Meridian* のように開拓期の領土戦争や残虐性を扱う作品が幾つも出版されるにいたった。それでも、アメリカ文学の原点であり、アメリカ民主主義の象徴として掲げられた *Huckleberry Finn* を、米墨戦争と関連付けて論じられることは一度もなかったのである。本稿は、一世紀半の時を経て、ようやく可能となった、解釈を提示するものである。

1. 米墨戦争と Mark Twain

Twain がミズーリ州 Hannibal で少年時代を過ごしていた時、テキサスとメキシコの国境付近は米墨戦争の最前線となっていた。テキサスはもともとメキシコ領であったが、1836年に一方的に独立を宣言して、共和国を名乗り、メキシコとの国境紛争に陥っていた。この紛争に乗じて、アメリカ合衆国は1845年にテキサスを自国の州として併合し、メキシコとの全面戦争へ持ち込んだ。そして武力でもってテキサス以西のメキシコ領土（本論末尾の図2.を参照）を割譲させ、現在の合衆国の約3分の1にあたる広大な領土を手中に収めることとなる。

当時のアメリカは、人類史上類を見ない規模の西方進出・領土拡大を推し進め、この拡張主義の果てにメキシコ領土にまで触手を伸ばしたわけだ。それゆえ米墨戦争とは、メキシコ側からすればアメリカ側の侵略行為に他ならなかったが、アメリカ人、特に南西部の地主階級や拡張主義者にとっては、北米全土に領土を広げる好機であり、Manifest Destiny を実現するための聖なる戦いだと言いきり立てた。そして開戦直後の1846年5月13日に、James K. Polk 大統領が5万人の volunteers を募集すると、この数の何倍にもあたる志願者が殺到してくる。本論で言う volunteers (militiamen, privates と呼ばれる) とは、戦争の大義に賛同して自主的に従軍する民間人のことで、日本語では義勇兵と訳されている。無報酬で、軍服もなく、武器や馬すら自前で参戦しなければならなかった。それでも「volunteers とは見返りを求めず、ただひたすら国家に尽くす義勇・美徳の兵」だと称賛する風潮が政府主導のもと高まり、この榮譽を求めて多くの若者たちが志願してきた。ただし政府の狙いは、volunteers で戦力を増強しようとしていたのではなく、多くの国民を巻き込むことで、戦争を正当化し、世論を味方につけることにあったと言われている。

最終的に合衆国は、累計で、26,922人の正規軍 (regular) と、73,532人の volunteers を紛争地に送り込んでいる。当時メキシコ領だったニューメキシコの総人口が7万人、カリフォルニアは4万人であったことを考えると、どれほど大掛かりな動員であったかが分かる⁴⁾。

特筆すべきは、volunteers 軍の組織化と運営が各州に一任されていたことだ。派兵は、母国防衛のためと謡ってはいるが、実際は領土拡大による利益が目当てであるため、州によっては、つまり旨味が多いか少ないかによって、温度差が生まれてくる。ならば各州の事情に合わせて volunteers 派兵の規模や時期を決めさせれば、反発も避けられるというわけだ。必然的に南西部では熱狂的な拡張主義と戦争熱が高まり、それに合わせて動員・派兵数も増えていくこととなった。

Twain が当時暮らしていたミズーリでは南西部でも最多に近い動員数を誇り、計8回にわたって volunteers の部隊を組織・派兵し、累計5,000人の若者たちを戦地に送り込んでいる。1840年のミズーリ州人口が383,702人 (U.S. Bureau of the Census) であったことを考えると、

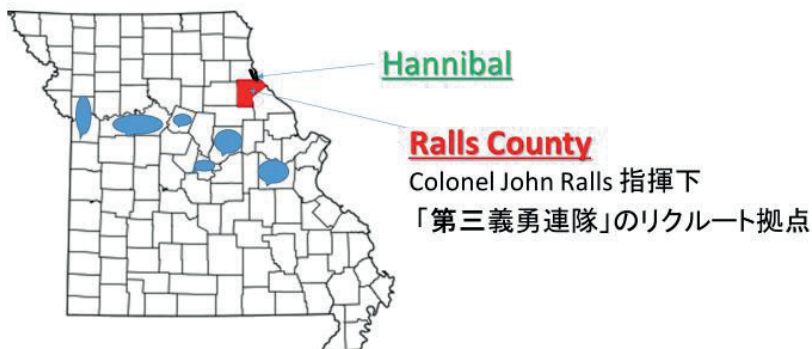
若くて従軍可能な男性のおよそ10人に一人が volunteers に志願したことになる。辺境地ミズーリで貧困にあえぐ若者たちにとって、従軍は社会階層を昇るための数少ない手段であるばかりか、bounty land の特典も魅力であった。James W. Oberly によれば、volunteers は、条件さえあえば、一人最大で160エーカーの bounty land の権利書が政府から授与された。これにより19世紀末までに全米で九つに一つの家族がこの権利書を手にし、その殆どが、第三者に売却して現金化したと言われている⁵⁾。

ミズーリ州政府も volunteers の宣伝と募集には力を入れていた。例えば1847年に「ミズーリ第一義勇連隊 (1st Regiment of Missouri Mounted Volunteers)」が一年の遠征を終えて凱旋するさいには、St Louis で記念式典を催し、熱烈な歓待で出迎えた。そして祝賀会のスピーチには、ミズーリ選出の上院議員 Thomas Hart Benton (拡張主義の急先鋒であり、Manifest Destiny の熱烈な擁護者) が立ち、第一連隊が数に優る敵を打ち破り、「今世紀最大の偉業」を持ち帰ったとして、最大級の賛辞を送っている⁶⁾。実際に「ミズーリ第一義勇連隊」は、今なおミズーリの誇りとして語り継がれる伝説的な部隊だ。

volunteers の募集は、政府や有力者の支援を受けて、軍歴のある地元名士のもとで行われていた。当時は自治会クラブのような組織が各地にあり、それぞれのクラブで影響力がある名士(軍歴者)が、クラブの青年たちをリクルートして、義勇連隊を編成していったのである。いわば地元名士を頂点としたリクルート拠点が各地に設置され、クラブの連帯感を利用して近隣の青年たちを取り込んでいくわけだ。図1. のミズーリ州地図には、「第一義勇連隊」のリクルート拠点となった郡に●を付けている。ミズーリ州を横断して駐在させることで、草の根的に、そして確実に volunteers を集めていたことが分かる。

図1.⁷⁾

ミズーリ州全域地図
volunteers リクルート・ネットワーク



* ●印:「第一義勇連隊」のリクルート拠点

1847年 Twain が12歳の時、彼の学校仲間だった Reuel Colt Gridley (1829-1870) も volunteers に志願している。Twain と Gridley の二人が住んでいた町 Hannibal (図1. では黒線部分) の隣に Ralls County という郡がある。同郡の名士 Colonel John Ralls (1807-1882) が近隣の volunteers を募って、「ミズーリ第三義勇連隊 (3rd Regiment of Missouri Mounted Volunteers)」を立ち上げており⁸⁾、Gridley もここに入隊している。地理的状况から考えると、地元のクラブで誘われるままに志願したのだろう。

Twain も成人すると、同地域のクラブに入り、全く同じ軌跡を辿って、南北戦争の volunteers になっている。というのも、くだんの Colonel John Ralls は自らのリクルート拠点を米墨戦争後も存続させ、南北戦争時には南軍の volunteers 集めに加担していたからだ。そこに26歳になった Twain が、地元の仲間たち15人程と連れ立って志願している。Twain は当時、蒸気船操舵主としての仕事にあぶれていて、食い扶持に困っていたことから、仲間たちと勢いで従軍してしまったという。しかし、若気の至りとはいえ、volunteers に志願してまで南軍そして奴隷制を支持したという事実に、多くの Twain 研究者は困惑した。Huck が黒人奴隷 Jim の逃亡を助け、必死に奴隷制度と戦っていたのに、作者本人は安易に奴隷制を擁護していたのだからだ。だが上で見てきたように、Twain にはむしろ選択の余地などなかった。米墨戦争時に敷かれたリクルート・ネットワークに子供の時から取り込まれていたために、気が付けば、南軍に入る道がお膳立てされてしまっていたのである。戦争は濁流と同じで、一度飲み込まれると、いかに抗おうと流れには逆らえず、敵味方を選べなくなる。これについては、本論の最後で、改めて論じたい。

米墨戦争に話を戻すと、制度化されたリクルート・ネットワークに、10人に1人という志願率、友人の参戦や州全体の戦争熱などを考え合わせれば、12歳だった Twain にとっても従軍は身近な問題であった。*Tom Sawyer* 第3章で、Tom たちは St. Petersburg (Hannibal の物語上の名称) で仲間の少年たちと戦争ごっこをしている。

... [Tom] hastened toward the public square of the village, where two “military” companies of boys had met for conflict, according to previous appointment. Tom was General of one of these armies, Jo Harper (a bosom friend) General of the other. These two great commanders did not condescend to fight in person—that being better suited to the still smaller fry—but sat together on an eminence and conducted the field operations by orders delivered through aides-de-camp. Tom’s army won a great victory, after a long and hard-fought battle. Then the dead were counted, prisoners exchanged, the terms of the next disagreement agreed upon and the day for the necessary battle appointed; after which armies fell into line and marched away, and Tom turned homeward alone. (35) [下線は筆者]

ミズーリの義勇連隊は全て、“company”と呼ばれる100人程度の中隊を一単位として編成されていたこと、くだんの Colonel John Ralls (Hannibal 近隣リクルート拠点の指揮官) が、ミズーリ義勇軍全体の “aides-de-camp” を務めてきたことなどを考えると、学校仲間や町の知り合いが米墨戦争に従軍していく姿を真似て戦争ごっこをしていたことになる。単に憧れていただけではない。近い将来、自分たちも volunteers として戦う可能性があることを意識して、シュミレーションしていたと言ってもいい。

2. 西部冒険小説と軍国主義

当時 volunteers は国家的な英雄であり、Tom ら南西部の子供たちは、そして恐らく Twain 本人も、volunteers の兵隊ごっこで盛り上がる、立派な軍国少年に育っていたわけだが、そうした時代背景を、Jeremiah Clemens の *Bernard Lile* (1856) と *Mustang Gray* (1858) から読み取ることができる。Jeremiah Clemens (1814-1865) はアラバマ在住の弁護士で、米墨戦争では米国軍人として参戦し、のちに大佐として volunteers 部隊の指揮官も務めている。戦後はアラバマ州の上院議員にまで上り詰めていることから、武功により社会的地位を固めた典型的な人物である。彼は米墨戦争での経験をもとに、先の二作品を執筆し、出版直後から高い評価を受けていた。

ただし、これらの二作品が時代とともに風化し、20世紀には完全に埋没していたのは確かだ。そこへ McCarthy が、*Blood Meridian* の下敷きに利用したことで、にわかには再注目されるようになる。今では歴史的価値が認められ、テキサス独立革命と米墨戦争を扱った最初の小説であり、同時代人が John Joel Glanton (1819-1850, Glanton Gang の指揮官) を描いた唯一の物語として有名だ。

本論も *Blood Meridian* に触発されて、Jeremiah Clemens の *Bernard Lile* と *Mustang Gray* を調べていくと、これらの小説が Twain に大きく影響を及ぼしていることが分かってきた。実を言うと Jeremiah Clemens は Twain のまた従妹であったのだが、米墨戦争を扱っているためか、Twain 研究では看過されていた。Twain が影響を受けた作家や作品の研究は盛んになされており、調べ尽くされたと思われていたため、Jeremiah Clemens が抜け落ちていたことはむしろ驚きである⁹⁾。Twain は当人と会ったことはないものの、一族の自慢として好印象を持っていた (*Autobiography of Mark Twain Volume 1*, 205)。しかも Twain が作家として全国的に認知されるのは30代後半、1870年代に入ってからであるが、それまでは Jeremiah Clemens のほうが知名度は高く、西部冒険小説の先駆けとして人気を誇っていたのである。

人気なものも当然だ。Jeremiah Clemens の作品は、テキサス独立戦争と米墨戦争を舞台としていながらも、戦争にかかわる醜悪な現実をきれいに消し去り、西部冒険小説ならではの偽善的でロマンチックな要素で詰まっていたからだ。米墨戦争は合衆国の自由を守る戦いであり、この戦いに身を捧げる volunteers は正義のヒーローとして登場し、華々しい活躍と冒険を繰

り広げていく。例えば *Mustang Gray* の主人公は、実在の volunteer で、伝説化した Mustang Gray こと Mabry B. Gray である。作中の彼は、良家の子息として生まれたが、愛する女性を傷つけた男を殺して、テキサスに逃亡する。しかしそこで仁義に篤い義賊へと転じて、人望を集め、米墨戦争が勃発すると我先に前線に身を投じて、仲間とともにアメリカの自由を勝ち取るのである。まさに勸善懲悪の世界であり、西部冒険小説の原点にして、アメリカン・ヒーローの原型がここにある。

ところが、実際の Mustang Gray は卑劣な戦争犯罪者でしかなかった。彼はテキサス独立戦争と米墨戦争に volunteers として従軍し、インディアンとの抗争を含め、猛々しい逸話を幾つも残した伝説的な人物である。だが同時に、メキシコにおける非武装の村や商人を襲って、虐殺と略奪を繰り返したことでも有名だ。同じ戦地にいた Dr. S. Compton Smith は、彼と彼の率いる volunteers 連隊を、“ruffians”の集まりであり、略奪だけが目的の“The gang of miscreants”だと吐き捨て、その悪行を非難している¹⁰⁾。

実は、これが volunteers の現実でもあった。*Mustang Gray* でも、テキサスで volunteers をリクルートするのに苦労はいらないと述べている場面がある。テキサスには借金や刃傷沙汰を起こして故郷に居られず流れてきた男たちであふれており、食い扶持欲しさに、危ない仕事にも喜んで飛びつくのだそうだ (246)。こういう無頼の徒が volunteers 軍に入ってくると、軍上層部の抑えもきかず、無報酬ということもあって、次第に戦地で略奪を繰り返す“gang”と化していく。しかも戦時下という免罪符を得て、殆ど罰せられることはなかったという (Foos 113-137)。

テキサス以外で集められた volunteers も、戦地で次第にたがが外れていき、酔った上での暴行、レイプ、馬泥棒から入念に計画された大規模な強盗まで悪化していく。そもそもリクルーターたちは volunteers を集めるために、戦地で土地投機や土地占有のうま味を宣伝し、略奪という報酬があることをほめかしていたのだ (Foos 42)。

ミズーリの volunteers が略奪をしていたという記録を探しだすことはできなかった。むしろ先に挙げた Thomas Hart Benton の歓迎スピーチでは、「ミズーリ第一義勇連隊」の兵士たちはいずれも良家の出身で、礼儀正しい美徳の徒であったとし、メキシコでインディアンに襲われていた村を救ったという美談を紹介している。だが、これは完全な嘘で、プロパガンダであった。彼ら実態は奥地出身の、貧しい荒くればかりで、その風体には正規軍の兵士も、嫌悪と侮蔑の一瞥を向けたという。Marshall Trimble によると、“Those backwoods boys were mostly unruly, unshaven, unwashed, unchurched; couldn't march; didn't wear uniforms; didn't stand on ceremony and were totally undisciplined. But were as full of fight as a gunny sack full of wildcats”であったため、General John Wool (1784-1869) は仰天して、彼らの外見はまるでメキシコ人か、インディアンのコマンチ族のようだ、と述べたという (“Los Goddammsies”)。こうした volunteers のなかには“butcher-knife boys”などと呼ばれていた開拓地特有の無法者

らも、進んで志願していた。暴力で生計を立てている者たちにとって、戦争は得意分野であり、渡りに船であったという。

明らかに Jeremiah Clemens は、自らも従軍経験があることから、volunteers たちの荒くれぶりや非道を見知っていながらも、小説では甘ったるく粉飾することで、戦争を正当化し、世間を喜ばせ、軍国少年を作り出す手助けをしていた。ちなみに *Mustang Gray* では volunteers が戦争に勝利をもたらす希望の光のごとく描かれているが、実際の volunteers はむしろ足手まといだった。Paul Foos によると、volunteers は民主主義を尊重し、自分たちで指揮官を選び、厳しい罰則を受け付けなかったという。つまり組織が民主的過ぎたがゆえに、規律や命令系統が緩んで、軍隊としては機能不全を起こし、戦力にならなかったのだ (Foos 85)。軍本部は、彼らの略奪や脱走にも頭を悩ませていた。それでも政府は、正規軍を主戦力としながらも、世間に向けては volunteersこそは西方進出の要であり、国境紛争の防波堤だとする虚構を植え付け、戦争の正当化とプロパガンダを続けたのである。政府寄りの新聞はそれに倣い、新聞などで volunteers の戦争犯罪や略奪行為を糾弾する声もかき消されていくこととなる。

Jeremiah Clemens は政府プロパガンダを物語にし、それが人気を得ていたことを考えると、当時の軍国主義的風潮がいかに浸透していたか容易に読み取れる。彼のもう一つの作品 *Bernard Lile* も、米墨戦争で活躍する架空の volunteer を描いた冒険小説であるが、その冒頭に掲げられた“Preface”で作者として次のように述べている。

Every man who writes a book, I suppose has a motive; but very few tell it honestly in the *preface*. Perhaps I shall best escape the suspicion of like disingenuousness by keeping mine a secret; remarking only, that if the American, when he lays it down, feels in his bosom a warmer throb for his country, higher appreciation of its excellencies, and a more devoted attachment to institutions, he need not look further for the *motive* which induced the author to undergo the labor it has cost, or the hope which sustains him in submitting his production to the criticism of the press.

The Author (x-xi)

要約すると、「本を書くに至る“motive”については、語弊を避けるため、あえて伏せておく。ただアメリカ人としての国家への熱い思いに、国家への愛と忠誠心に駆り立てられて、ペンを走らせたことだけは述べておきたい」、としている。つまり「愛国心」から本を出したのだと臆面もなく述べているのである。当然彼にとって「愛国者」とは、国のために命をかけて戦う市民兵であることは小説を読めば明らかなのだが、なぜ一般市民が命をかけて戦わなければな

らないのか、なぜそれが正義 (“moral”) であるかは、どこにも説明されていない。ただ「愛国心」「愛国者」そして国家の「正義」への盲信を読者、ことに少年読者に植え付けるばかりだ。

Bernard Lile が出版された約30年後の1884年に、Twain は *Huckleberry Finn* を出版する。そしてその冒頭において、先人作家 Jeremiah Clemens に倣って、自分も本を執筆するに至った “motive” について触れている。というよりも、先人作家との違いを、「注意書き (“Notice”)」として事前に釘を刺している格好だ。

Notice

Persons attempting to find a motive in this narrative will be prosecuted; persons attempting to find a moral in it will be banished; persons attempting to find a plot in it will be shot.

BY ORDER OF THE AUTHOR

Per G. G., CHIEF OF ORDNANCE (1) [下線は筆者]

この「注意書き」は、実を言うと、*Huckleberry Finn* における謎の一つとされてきた。なぜ軍規を模しているのか。なぜ物語に “motive” と “moral” を求めてはいけないのか、理由が判然としないのである。本論冒頭で述べたように、Twain 研究では南北戦争偏重の解釈が続いているため、“G. G.” とは北軍一の名将 General Grant (1822-85) だとする説が最有力視されてきた¹¹⁾。しかし物語の舞台は南北戦争が始まる10年以上前である。しかも深南部へと場面は移っていくのに、なぜ北部人 (しかも未来の北軍将軍) に戒められながら物語を読んでいかねばならないのか、矛盾しているのだ。

しかし物語の時代設定は米墨戦争のさなか、あるいは戦勝に沸いていた時期であったことを考えれば、米墨戦争の volunteers に対する軍規を模していたと考えると納得がいく。volunteers とは民間人であり、国民の代表とされていた。彼らを通して、政府は戦争礼賛の言説を国民全体に押し付けていたことは、すでに述べた通りである。つまり Twain の軍規もどきの「注意書き」は、volunteers だけでなく、軍国主義的な風紀を強いられてきた全国民に向けたものであったと考えれば納得がいくのである。Jeremiah Clemens の序文によれば、米墨戦争の物語には「愛国心」という “motive” が欠かせないのであるが、そんなものを、同時期を扱っているとはいえ、私の物語に見出そうとする者は処罰される。そもそも国家の求める “moral” (正義) など、この小説には備わっていない、と Twain はからかっていた。国家のプロパガンダに自らも踊らされ、苦難を強いられたからこそ、かえって冷やかに当時の風潮を見ることができたのであろう。

「注意書き」に続く第2、3章では “Tom Sawyer’s Gang” が登場する。Tom は仲間たちと gang を結成し、皆で “Spaniards” の商隊を襲って、金品を強奪する計画を発表する。明らか

に *Mustang Gray* をお手本にして、義賊ごっこ遊びをしようとしていたのだ。というのもテキサスで “Spaniards” はスペイン系メキシコ人を指し、米墨戦争を契機として冒険ロマンスの悪役ステレオタイプとなっている。その原点が Jeremiah Clemens の小説であったことは間違いない。なかでも彼の *Mustang Gray* は “gang” を率いて、女性を手籠めにした悪徳商人の “Spaniards” を成敗し、その財産を奪って解放するという痛快なクライマックスを迎えている。“Tom Sawyer’s Gang” はこれを真似ているわけだが、戦時下にあつて “Spaniards” は敵国の人間である。これを悪役として設定し、打ち負かすヒーロー劇なのだから、当時の軍国少年なら大変盛り上がったことだろう。ヒーローごっこを超えた、国粹主義的な陶酔感を味わえるからだ。

ところが Huck は浮浪児であつたため、冒険小説など読んだことがない。社会から疎外されていたため、戦勝に沸き立つ世間にも疎くて、軍国少年たちのロマンが理解できない。襲撃の真似事をして何が楽しいのかと尋ねるほどだ。最終的に、Tom の話は（政府主導の軍国主義的言説でしかないのだが）、単なる幻想で、一銭の得にもならない、と Huck は結論付ける。そして Tom は Huck を道理の分からぬ愚か者だとなじるのだ。要するに Tom は軍国少年だつた Twain を代弁していたとすれば、Huck は戦争から30年以上経て冷やかに当時を振り返る大人の Twain を代弁していたのだろう。

ところで確認しておくが、本論で言う “gang” とは、“volunteers” が徒党を組んで、あるいは連隊全体で、民間人から略奪する戦争犯罪者集団であり、“The gang of miscreants” を意味する。Glanton Gang のように、戦争後に volunteers 崩れが集まり、荒仕事で儲けようとする傭兵部隊や強盗団も含まれる。これら “gang” の厄介な点は、戦争での武器の扱い方や戦闘方法を学んだことだ。軍隊は、陣を敷いて、効率的に、できるだけ多くの敵を殺すよう組織化されている。すなわち、大量殺戮に長けているのだ。したがって、軍隊仕込みの “gang” が農園などを襲う時、西部時代劇の一場面にあるような、悠長に銃を突きつけてホールド・アップさせるようなことはない。*Blood Meridian* に登場する Glanton Gang のように、まずは農園を取り囲み、外側から一斉射撃しながら、包囲網を狭めていく。民間人に反撃の余地など与えず、それゆえ強盗の成功率は高く、新たな犯罪を生むことになる。

こうした戦闘慣れした volunteers は、戦争終結ともに仕事にあぶれ、復員先でも村や農家を襲う者が現れてくる。volunteers は英雄どころか、全米、特に開拓地を荒らす重篤な社会問題となっていく。これについては、次の章で詳しく述べる。

3. 派兵とともにあつた Huck と Jim の旅路

Tom Sawyer から *Huckleberry Finn* へ物語が移るにあたって、子供たちのごっこ遊びは、従軍したての volunteers から、戦地で略奪の味を覚えた “gang” へと進化している。この先は、ど

うなるのであろうか、*Huckleberry Finn* 最後の舞台 Phelps Farm へと論を移したい。Huck と Jim は当初、自由州イリノイに向かう計画を立てていた。そこなら Jim も、主人のもとへ送り返されず、自由黒人として暮らすことができるからだ。ところが作者は、彼らの計画を失敗させて、あえて奴隷制強固な南部州へ、逃亡奴隷にとっては極めて危険なアーカンソーまで下らせるという筋書きにしている。これについても、*Huckleberry Finn* 最大の謎の一つとされ、20世紀末に熱い議論が巻き起こっている。当時は、繰り返すが、南北戦争に重きを置いた文学解釈が優勢であったため、*Huckleberry Finn* を奴隷解放の象徴として崇める風潮が生まれていた。この文脈において、Huck と Jim が深南部で奴隷制下に敷かれるのは、敗北のように感じられたわけだ。

だが米墨戦争という観点から見ていくと、彼らの南部入りは、むしろは自然な成り行きであった。というのも米墨戦争では延べ10万人の兵士が戦地に送られたと述べたが、その主な経路は、図2.にあるように、St. Louis からミズーリ州境の Fort Leavenworth と Bent's Fort を経て、そこから Santa Fe、Socorro を経て南下するコースと、Huck と Jim のように St. Louis からミシシッピ河を船で下っていくものである。つまり、派兵の起点としてミズーリには全米から続々と兵が集まり、同州を取り囲むようにして、戦地に向かう流れが出来上がっていた。この従軍大移動とともに、あるいは並行して、Huck と Jim も河を下っていたことになる。

ミシシッピ河を下る派兵ルートでは、New Orleans まで下り、そこで船を乗り換えて、海岸沿いにメキシコへ向かうのが一般的であった。しかし、途中で陸路に切り替えると、最短でテキサスの戦地入りすることもできる。その分岐点がまさに、Huck らが流れ着いた Phelps Farm (アーカンソーの最南部に位置する架空の農園で、Grand Lake Landing の辺り) である。図2.にある通り、ここから西に向かう一本道が物語のなかで登場しており、Huck もそこをわずかだが歩いている¹²⁾。この一本道の先には、1844年当時の地図によると、テキサスを横断して、メキシコの戦闘地域 Chihuahua までの経路が伸びていたのだ¹³⁾。つまり Huck が辿り着いた Phelps Farm は、戦地と一本道でつながっていたのである。

Huck は、物語の最後で、Phelps 家を密かに抜け出して一人で Indian Territory (先ほどの一本道の数キロ北) へ逃げるつもりだと述べている。だが実際に家出した少年が、食いつないでいくためには、先ほどの一本道を通してテキサスへ流れていくのが順当であったことだろう。それに気付かせてくれたのが、*Blood Meridian* である。この作品が *Huckleberry Finn* の影響を受けていることは多くの批評家がすでに指摘しているところであるが、とりわけ主人公 “kid” (名前は最後まで明かされない) は Huck をもとに創られていることは明らかだ。というのも “kid” は、Huck と同じように、母親の顔も知らずに育ち、1849年14歳の時に横暴な父親のもとから逃げ出す。放浪のすえ、ミシシッピ河を船で下ると、アーカンソーの南、まさに Phelps Farm の辺りで下船している。つまり “kid” は、Huck と全く同じ年齢で、同じ時代と境遇を生き、Huck 最後の舞台に立つ。そして Huck の物語を引き継ぐように、Huck と同じく

西に向かうわけだ。ただし作者 McCarthy は当時の地図を検証し、少年が辿る現実的な経路として、テキサス入りの筋書きへと修正してしまった。

言い換えれば Huck がテキサスに入っていた場合、どのような旅が待ち受けていたのか、“kid”を通して見ることができる。ところが“kid”が見たテキサスは、*Huckleberry Finn* とは全く異なる世界であった。町や村が点在してはいたが、無法地帯も多く、戦後ながらメキシコ州 Sonora への侵略も続いていた。volunteers 崩れを集めた私設軍が、カリフォルニア政府の領土拡大の思惑を受けて、非公式にメキシコ領への“filibustering”を続けていたからだ¹⁴。インディアンとの交戦も繰り返されていた。“kid”のような浮浪児が得られる仕事と言えば、傭兵だけであった。彼は先の私設軍にリクルートされ、幾つもの戦闘をくぐり抜けるが、最後には、頭皮狩りの傭兵集団 Glanton Gang に入ることになる。リーダーの John Joel Glanton (1819-50) は、戦争と暴力に翻弄された、時代の申し子とでも言える人物であった。彼は若い頃に婚約者をインディアンに殺されたと言われている。また貧しさゆえ、10代前半で Texas Rangers (volunteers 部隊) に入って、テキサス独立戦争と米墨戦争を戦う。戦争以外で生きる術を知らなかったのだろう。戦争が終わると、volunteers 崩れたちを集めて Glanton Gang を組織し、インディアンの頭皮狩り (scalp hunter) を始めることになる。メキシコではアパッチ族の度重なる襲撃に苦しめられていたため、Sonora や Chihuahua などの大都市は Glanton Gang と契約を結び、アパッチ族の討伐を依頼したからだ。メキシコの住民にとって、つい最近まで自分たちを苦しめていた敵兵であり略奪者が、今度は自分たちを守る傭兵になっている、という不思議な現象が起きている。ところで John Sepich の *Notes on Blood Meridian* によると、当時の傭兵は実入りがよく、最新式の武器を携帯していたという (7)。というのも先の都市は、インディアン一人の頭皮につき一定の報奨金が支払う契約をしていたため、部族集団を一つ襲うと、大きな収益を上げることができるからだ¹⁵。

“kid”は Glanton Gang に入ったことで、傭兵の仲間とともに、インディアンだけでなく、味方であるはずのメキシコ人やアメリカ人まで大勢殺していくことになる。というのも傭兵たちは、戦争の後遺症からだろう、酒に溺れ、残虐で、無益の暴力も振るうようになっていた。いつも交戦中のような精神状態にあるため、メキシコの町で飲んでいたら、傭兵の一人が、銃声を聞いただけで、体が勝手に反応して反撃してしまう。まるで狂った兵器である。だが戦争慣れしているため、このように一人が反射的に攻撃を始めると、仲間も即座に援護に回り、俊敏に陣を引いて、周りの通行人を皆殺しにして、逃げ去っていく。Glanton Gang は、この銃撃戦でメキシコ軍に追われる羽目になり、追っ手への反撃や強奪などを繰り返し、最後は敵対するインディアンにほぼ皆殺しにされてしまう。彼らは、戦争のせいで暴力に溺れ、依存し、暴力ゆえに破滅していった、典型的な volunteers 崩れだったのである。

実は、アメリカ人としてのアイデンティティが形成され始める19世紀前半、volunteers は

アメリカ人の代表的な顔であり、模範として提示されていた。その volunteers が、*Blood Meridian* では、戦争の戦闘技術と旨味を覚えてしまったがために、戦争以外に生きる術を見出せず、“gang”へと落ちぶれ、果ては狂犬のように見境なく攻撃して、祖国すら荒らすまでに至る過程が、広大な想像力をもって精彩に再現されている。戦争が volunteers を怪物に育てていく過程を、体感的に理解させるのだ。この怪物には、従軍したアメリカ人なら誰もがなりえた。そして浮浪児“kid”は怪物となり、Huckも同じ運命を辿っていたかもしれない現実が、ここにはほのめかされていたのである。

戦争の怪物たちが、戦後の新たな稼ぎ先を求めて、アメリカ領にまで流れ込んでくる恐怖が、*Huckleberry Finn* の Phelps Farm では描かれていた。Huckは流れ着いた Phelps Farmで、思いがけず Tomと再会し、またもや“gang”ごっこに付き合わされてしまう。しかも今回は、“Indian Territory”に隠れ住む“a desperate gang of cutthroats”が Phelps Farmを襲撃するという密告文まで届けて、大人たちまで巻き込んでの大芝居を打つこととなった。

Blood Meridian で見てきた通り、戦中・戦後のテキサスとメキシコには Glanton Gang のような volunteers 崩れの“gang”が群雄割拠する世界であり、Phelps Farmはそこと一本道とつながっていた。戦地に巣くっていた“gang”が Phelps Farmにまで流れ込んでくるのだと、誰もが怯えたに違いない。実際に volunteers の一部は、復員後に強盗団を組んで、ミシシッピ川流域を荒らすようになっていた。またアーカンソーから従軍した volunteers 部隊は、メキシコで最も兇悪で冷酷な略奪をしてきたことで知られている (Foos 144)。自分たちの実体験から“gang”の残忍さを知っていた上、犯罪者ならではの被害妄想も膨らんで、ことさら怯えていただろう。だからこそ、村の男たちは大勢 Phelps Farm に集まって、銃を抱えて決死の防衛に立ったのである。彼らを襲ってきた真犯人は、しかしながら、顔なじみの少年 Huck と Tom であった。

彼らは、近い将来、ごっこ遊びを現実のものにしてしまうのか。少なくとも彼らのモデルであった Twain 本人は、26歳の時に“gang”に入って、近隣の民間人を襲っている。Twain が、volunteers のリクルート拠点にからめ取られ、南北戦争の南軍に志願していたことは、すでに述べた。だが南北戦争は混乱を極め、戦闘未経験の volunteers を訓練し、軍として統率するのを諦め、少人数の volunteers を仲間内で組ませ、ゲリラ戦に徹するように指示していた。だが指揮系統が緩いがために、volunteers のゲリラ部隊は“gang”化していくことになる。

なかでもミズーリは、隣州のカンザスを巻き込んで、奴隸制反対派(北軍支持者)と奴隸制賛成派(南軍支持者)に分裂し、住民同士が衝突するようになっていた。そのなかで南軍ゲリラは、“bushwhackers”と呼ばれ、地元で対立する北軍ゲリラ“jaywhackers”と、仁義なき報復合戦を繰り返していたのである。その様子は、指揮系統に管理された軍隊同士の戦いではなく、地元の“gang”同士の抗争であった。軍からの命令などお構いなしで、感情の赴くまま、敵方の内通者と思しき住民を殺し、敵方を支援する一家を追い出し、反対派を誘拐して処罰と称して残忍な拷問

することもある。なかには、敵方の拠点とされる村や農園を襲い、女子供にいたるまで皆殺しにする事件まで起きる。その最たる例を挙げるとすると、William Quantrill 率いる “bushwhackers” が反奴隷制派の村を襲って、非武装の男性150人を虐殺した Lawrence Massacre である¹⁶⁾。民間人への攻撃や非道が相次ぐことから、南北両軍は volunteers のゲリラ部隊を解体するようになっていく。もちろん “bushwhackers” が、戦後に強盗団へと転じる例もある。

Twain 本人も、ゲリラたちによる、敵味方入り乱れての混沌たる抗争については聞き及んでいたが、なかでもまた Hannibal 時代の友人が “bushwhackers” に入って、隣村の数家族を虐殺した事件については、忸怩たる思いで、振り返っている。おとなしい普通の青年であったのに、顔見知りの家族を殺すというのは、いかなる心境だったのか、と漏らしている (*Autobiography of Mark Twain Volume 2* 255)。

Twain が属していた volunteers 部隊 Marion Ranger も間違いなく “bushwhackers” であり、“gang” であった。彼らは、友人15人ほどで組んだ小さなグループで、わずかな訓練を受けた後、最初に指示された作戦が、ゲリラ部隊の常套手段、待ち伏せた上の奇襲攻撃であったからだ。彼の戦争体験を書いた唯一の短編 “The Private History of a Campaign That Failed” によると、Twain は仲間とともに小屋に身を潜め、壁の穴に銃を突き出したまま、敵軍が森の細道を通るのを待ち伏せた。すると、かすかな人影が見えてきた。司令官の号令を受けて、ゲリラたちは一斉射撃を浴びせると、一人の男が銃弾に倒れたのである。近づいてみると、軍服を着ていない。軍隊どころか、森を一人で通っていただけの旅人を殺してしまったのである。Twain はその罪悪感に震え、人を殺した恐怖から、隊列から逃げ出したという。

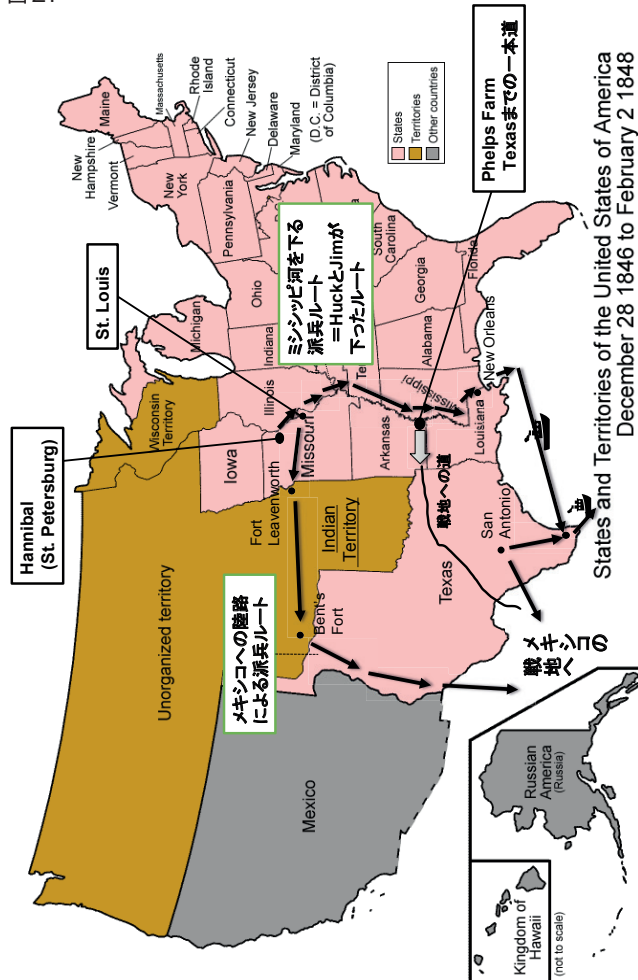
現代の解釈では、Twain が民間人を殺してしまったことを過ちと考え、戦場を後にしたとされている。しかしながら、“bushwhackers” は、そもそも民間人を殺すよう求められていた。彼らの標的は北軍支持の近隣住民であり、怪しいスパイや内通者まで見境なく殺していた時代である。Twain が “gang” を抜け出したのは、むしろ民間人を、そして隣人や知人を、殺さねばならない戦争の狂気に怯えたからではないだろうか。

おわりに

Huckleberry Finn の最後の11章は、上で述べたように、Phelps Farm を舞台として Tom Sawyer の無意味なごっこ遊びが延々と続けられるばかりである。しかも、これにより Jim は奴隷に戻され、村には無用の混乱と恐怖がもたらされるのである。Huck は Tom のやり方に疑問を持ちながらも、巻き込まれていく不甲斐なさ。物語の最後がこうした茶番劇で終わることに、多くの批評家は不満を抱き、Huck と Jim の逃亡を奴隷制への挑戦と捉える批評家のなかには、不必要なエピソードと断じる者まで現れた。

しかしながら、米墨戦争という視点から見ると、むしろ欠かせない結部であった。米墨戦争に向かう派兵軍は、ミズーリを取り囲んで、弧を描くように南下する。Huck は、この円状の流れに取り込まれて、戦地と直につながる Phelps Farm に辿り着いてしまう。Huck は戦争という濁流に飲み込まれていたのである。この濁流に一旦飲み込まれると、本論で見てきたように、敵味方を選ばず、ただ押し出されるままに進む先は、volunteers という国家を守る英雄か、それとも “gang” という祖国すら荒廃させてしまう無法者か。あるいは Twain のような不名誉な脱走兵であったか。そうした不穏な未来が Phelps Episode には映し出されていた。Huck は戦争の時代にあって、戦争という濁流に取り込まれたアメリカ人たちの代表である。そう考えて再読する時、「この物語に “motive” (愛国心) と “moral” (国家の正義) を見出すとする者は罰せられる」という物語冒頭の警告から、作者の複雑な思いが伝わってくる。

図2. 17)



謝辞

本研究遂行にあたり、日本学術振興会、科学研究費助成事業（課題番号：22k20042）の助成を受けたものである。ここに厚く御礼申し上げる。

また、日本マーク・トウェイン協会・第25回全国大会（Zoom 開催）にて、研究発表したものに加筆修正を加えている。

注

- 1) Mark Twainの全作品のなかで米墨戦争に言及している箇所は一切ない。また彼の全3巻に及ぶ自伝においても、米墨戦争に言及している箇所は一つも見つかっていない。Jacob Richard Stoker (1820-98)のように、米墨戦争への従軍経験がある友人は複数いたことは分かっているが (*Mark Twain's Letters* 2:362, 4:37, 115)、現在出版されている彼の書簡集において米墨戦争について言及している箇所は一つもない。
- 2) 以後、McCarthyとTwainの小説に合わせて、「インディアン」と呼ぶ。
- 3) HuckとTomは*Tom Sawyer*では12歳から13歳、*Huckleberry Finn*では13歳か14歳である（同章第17章で年齢を述べている箇所がある）。彼らはTwainが12歳から14歳の頃（1847年から1849年頃）をモデルにしていると考え、*Tom Sawyer*と*Huckleberry Finn*の舞台は、米墨戦争の最中から戦後であったことは間違いない。
- 4) Paul Foos, *A Short, Offhand, Killing Affair* (85, 151)を参照。
- 5) James W. Oberly, “Military Bounty Land Warrants in the United States, 1847-1900”を参照。
- 6) William H. Richardson, *The Mounted Volunteer* (81)を参照。
- 7) 図1はpublic domainの白地図に筆者が書きこんだものである。
- 8) 「第三義勇連隊」のリクルート拠点は、この一箇所しか記録に残っていない。
- 9) Twainが読んだ図書を全て網羅していると思われていた*Mark Twain's Literary Resources*にも、Jeremiah Clemensの名前は登場しない。
- 10) Dr. S. Compton SmithはMustang Grayを次のように激しく非難している。
Texas Rangers . . . were mostly made up of adventurers and vagabonds. . . The gang of miscreants under the leadership of Mustang Gray were of this description. This party, in cold-blood, murdered almost the entire male population of the rancho of Guadalupe, where not a single weapon, offensive or defensive, could be found! Their only object was plunder!” (*Chile Con Carne: or, The Camp and the Field* quoted in *Songs of the Great American West* 60) [下線は筆者]
- 11) Michael Patrick Hearn, *The Annotated Huckleberry Finn* (4)を参照。
- 12) 作品では、Phelps Farm 付近からLafayette Countyへ続く一本道について触れられている場面がある (*Huckleberry Finn* 274)。Lafayette Countyはアーカンソーの最西端にあり、テキサスと接している。
- 13) Josiah Gregg, “A Map of the Indian Territory”を参照。

- 14) “filibustering”とは、領土獲得のため、交戦状態にない他国へ違法に侵入・攻撃することを意味する。Sepichによると、私設軍が、カリフォルニアから非公式の支援を受けて、戦後もメキシコ領に攻撃を仕掛けていたことが記録に残っている(20-21)。
- 15) 頭皮に対する報奨金額や、傭兵の給料などについては、John Sepich, *Notes on Blood Meridian* (7) を参照。
- 16) 首謀者 William Quantrill はミズーリの奴隷制支持派の農園が襲われたことへの報復として、カンザスの反奴隷支持の村を襲った。Twain との関係については Bernard Devote, *Mark Twain’s America* (61) を参照。
- 17) 図2. は public domain に筆者が派兵ルートを書きこんだものである。

引用文献

- Clemens, Jeremiah. *Bernard Lile: An Historical Romance, Embracing the Periods of the Texas Revolution, and the Mexican War*. J. B. Lippincott & Co, 1856. Reprint.
- . *Mustang Gray: A Romance*. J. B. Lippincott & Co, 1858. Reprint.
- Devote, Bernard. *Mark Twain’s America*. U of Nebraska P, 1960.
- Foos, Paul. *A Short, Offhand, Killing Affair. Soldiers and Social Conflict during the Mexican-American War*. The U of North Carolina P, 2002.
- Gregg, Josiah. “A Map of the Indian Territory, Northern Texas and New Mexico Showing the Great Western Prairies.” *Commerce of the Prairies: or, The Journal of a Sante Fe Trader, 1831-1839*. H. G. Langley, 1844. *The University of Texas at Arlington Libraries Special Collections*, https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Gregg_A_Map_of_the_Indian_Territory_1844_UTA.jpg.
- Gribben, Alan. *Mark Twain’s Literary Resources: A Reconstruction of His Library and Reading*. Newsouth Inc, 2022.
- Hearn, Michael Patrick. *The Annotated Huckleberry Finn: Adventures of Huckleberry Finn Tom Sawyer’s Comrade*. Norton & Company, 1981.
- McCarthy, Cormac. *Blood Meridian : or the Evening Redness in the West*. Picador Classic, 1985.
- Oberly, James W. “Military Bounty Land Warrants in the United States, 1847-1900,” 17 Feb. 1992. *ICPRS*, <https://www.icpsr.umich.edu/web/ICPSR/studies/9514>.
- Richardson, William H. *The Mounted Volunteer: A Diary of a Private of Missouri Mounted Volunteers on the Expedition to California, 1846*. Oakpast Ltd, 2010.
- Sepich, John. *Notes on Blood Meridian*. U of Texas P, 1993.
- Silber, Irwin, editor. *Songs of the Great American West*. Dover, 2012.
- Smith, S. Compton. *Chile Con Carne: or, The Camp and the Field*, Ford & Fairbanks, 1857.

Trimble, Marshall. "Los Goddammsies," *True West Magazine*. 1 Oct. 2015.

<https://truewestmagazine.com/article/los-goddammies/>.

Twain, Mark. *Adventures of Huckleberry Finn*. U of California P, 1985.

----. *Autobiography of Mark Twain Volume 1*. U of California P, 2010.

----. *Autobiography of Mark Twain Volume 2*. U of California P, 2013.

----. *Mark Twain's Letters Volume 2: 1867-1878*. U of California P, 1990.

----. *Mark Twain's Letters Volume 4: 1870-1871*. U of California P, 1995.

----. *The Adventures of Tom Sawyer*. U of California P, 1980.

----. "The Private History of a Campaign that Failed." *Mark Twain: Collected Tales, Sketches, Speeches, and Essays 1852-1890*. The Library of America, 1992, pp.863-82.

United States. Bureau of the Census. "1840 Overview."

https://www.census.gov/history/www/through_the_decades/overview/1840.html.

(やまもと・ゆうこ 短期大学部准教授)